一

鰻屋の宮戸川の井戸端には、鉄五郎が店を始めたとき、すでに植わっていたという不細工な枝ぶりの柿の木があった。その下には薪を割るときに使う古木の切り株がおいてあって、鰻割き職人の松吉が一服する場所になっていた。

だが、葉を落とした柿の木の下にはその朝、松吉の姿はなかった。

風を引いて昨日から仕事を休んでいた。そこで今朝も磐音と次平じいさんだけがまな板の前で包丁を振るっていた。

次平の手捌きは鈍く、磐音が五匹割くところを二匹いけばいいほうだ。それでも丁寧な仕事で宮戸川には欠かせぬ戦力だ。

「次平どのは、風は引かれぬか」

「近頃の若い奴ほどやわじゃねえ」

磐音の問に次平は威張ってみせた。が、其の先から洟が垂れてずるずると啜り込んだ。

其の朝、次平は真新しい綿入れの袖無しを着込んで、首に手拭いを巻いていた。

「袖無しはおかみさんが手縫いされたか」

「女房は十何年前に死んだ」

ぶっきらぼうに答えた次平に磐音は慌てて謝った。

「知らなかった。相済まぬ」

一人暮らしの長屋の近くに娘夫婦が住んでいて、孫を連れて時折顔を出してくれるという。

「娘が気を遣って一緒に暮らそうと言ってくれるがよ、一人が気楽だ。旦那、そう思わねえか」

「家族が近くにいて、友がいれば、それもよいな」

「友なんて気の利いたものはいないがよ、飲み仲間がいらあ」

磐音は次平や松吉の暮らしぶりを全く知らなかったことに思い至った。

「女房が死んでそろそろ十二年か」

と次平が言ったとき、宮戸川の勝手口から品川柳次郎が顔を出した。

「精がでますねえ」

「おや、品川さん、なんぞ用事ですか」

「仕事の後でいいですよ」

柳次郎は、切り株に腰を下ろした。

おとくと史吉の仇討から十日余り過ぎた日のことだ。

「坂崎さんは、鰻を割くのも凄みが増してきましたね」

御家人の次男坊は、裾の解れた袴を穿いてのんびりした顔で磐音のしごとを見下ろした。

「急ぎですか」

それでも磐音は念を押した。

「待てないことはないですよ」

と答えた柳次郎は、

「先日、竹村の旦那にえらい貧乏籤を引かされたようですね」

と訊いた。

「小梅瓦町の一件ですか」

「竹村の旦那が坂崎さんに押し付けた仕事は、徹夜で三百文の稼ぎじゃないそうですか。時分は実入りのいい仕事にさっさと鞍替えした。竹村の旦那らしいや」

「竹村さんは家族持ちですからね、稼ぎに必死です。それがしも日当以外に実入りになりました」

おとくは、野晒一味を叩き伏せる前金に五両前渡ししてくれたのだ。そのことを笹塚孫一に伺うと、

「そなたは仕事をしたのだ。一人頭十両は払えぬが、前渡し金はありがたく頂戴しておけ」

と気前のよい返事をくれた。だが、後で町奉行所が霜夜の鯛造一味の隠し金のうち、千両を密かに奉行所の探索費に繰り入れたと気付かされて、

（知恵者はやることが違う）

と感心したものであった。

ともかく日当の三百文の他に五両が手元に残ったのだ。文句どころか、竹村ざえもんには礼が言いたくなる仕事だった。

磐音のしごとぶりを見ながら、顎に生えた無精髭をのんびりと指先で抜いている柳次郎に、鉄五郎親方が、

「品川様も鰻割きのしごとをなさいませんか」

と笑いかけた。

「北割下水の貧乏御家人の次男坊ゆえ、仕事は何でも請け負うが、長くてぬるぬるしたものは苦手です。親方、こればかりは一匹一分と言われてもお断りです」

「一匹に一分出したんじゃあ、うちは一日で潰れますぜ。まあ、朝餉なと食べてお行きなさい」

「そちらは遠慮なく馳走になります」

本所深川は、武士町人の分け隔てがない。まして、貧乏が枕詞の御家人の次男坊になると、だれかれなく愛想よく付き合わねば生きてはいけない。

磐音は最後の一匹を割き終え、道具を井戸端で洗った。すると柳次郎が釣瓶で水を汲んで手伝ってくれた。

磐音は湯に行けそうにないと踏んで、丁寧に手と顔を洗った。

二人が宮戸川の台所で美味しい朝餉を馳走になって六間堀に出てきたのは、四つ前のことだ。

柳次郎の足は、竪川に向かっていた。

「どうしました」

「竹村の旦那のことですよ。先ほど、娘の早苗どのがうちに来て、父親が泊まっておらぬかと訊くのです。昨日、戻って来なかったらしい」

「どこかで酔いつぶれてしまったのか。もっとも飲み代があるとは思えぬが」

武左衛門は無類の酒好きだ。だが、懐が寂しいので酔い潰れるほど飲んだためしなど滅多にない。

「坂崎さんに貧乏仕事を譲って代わりに務めた本所松倉町の用心棒の仕事が、まだ続いているんです。このところ、旦那の懐は温かかったようです」

一日二分とかいう仕事が続いていたなら、武左衛門が酒に酔い潰れることは考えられそうだ。

「ともかく早苗どのを長屋に戻し、心当たりを探してみると約束して、坂崎さんのところに顔を出したのです」

「当てはあるのですか」

「まずは松倉町の仕事先です」

「医師と聞いたが、考えてみれば医師の用心棒とはまた奇妙ですね」

それだ、と柳次郎の語調が沈んだ。

「早苗どのに聞いてちょいと驚きました。松倉町の医師、不知火現伯というのは、評判の人物でしてねえ。上方の出らしいが、長崎の留学を終えると開業するには江戸がいいと、こちらに参った男です。開業した頃は、いわゆる徒歩医者、薬箱を自ら提げて往診に回っていた。その当時は、分け隔てなく患者を診ていたようだが、十年も前から、長棒駕籠の乗物医者に出世した。供も、薬箱持ち、挟箱持ち、草履取りとご大層だ。むろん長屋暮らしの日傭取りなんぞは相手にしなくなりました。うちのような貧乏御家人も門前払いです。

医師も出世すると患者を選ぶようになる。よくある話だ。

「徒歩医者から乗物医者に出世なされたきっかけなんですか」

柳次郎が頷くと、

「松倉町に肥前平戸藩松浦様の下屋敷があるのですが、下屋敷に滞在中の奥方が癪を起こしたとき、現伯が呼ばれて治したことがあるのです。それが縁で、大名家や高禄旗本の屋敷に出入りするようになり、患者は金のあるところに限り、供揃えをして箔をつけたってやつです」

二人は、北割下水から南割下水に進み、本所松倉町に入っていた。

「ごらんなさい。あれが不知火御殿とこの界隈で呼ばれる現伯の屋敷です」

柳次郎が指したのは、北割下水を越えて松倉町を北に入った本所新町との辻に堂々たる長屋門を構える屋敷だった。なまこ壁がぐるりと取り巻き、扉はしっかりと閉ざされて、森閑としていた。

「おかしいな。いつもは門前に駕籠や乗物が並んでいるんだがなあ」

柳次郎が首を捻り、どうしようかという顔で磐音を見た。

「品川さん、これはちと異常です。潜り戸を叩いてみましょう」

「今日の診療は休みじゃ」

という野太い声が響いた。

潜り戸の向こうに何人も人の気配がする。それも医家とも思えず、侍のようだ。

「患者ではありませぬ。こちらに竹村武左衛門が世話になっておるはずですが、昨夜より戻って参らぬので、家人が心配しております。われらは竹村の友人にございます」

磐音の言葉に潜り戸の向こうが沈黙した。そして、ひそひそと何事か相談する気配があって、戸が薄く開かれた。

覗いたのは、浪人者だ。

「竹村はおりますか」

磐音の問いに浪人が首を横に振り、言った。

「二人か、入れ」

磐音と柳次郎は潜りを跨いだ。すると門の側に三人、さらに玄関先に二人いて、磐音たちをじっと見た。玄関先にたつ総髪の人物は、きちんとした羽織袴姿の巨漢だった。年の頃は四十前だろう。

「こちらに来られよ」

潜りを開けた浪人が総髪の侍のもとに磐音と柳次郎を連れて行った。

「こちらは当家のご相談役、忠也派一刀流道場の主、美濃部三五郎様だ」

総髪の人物をそう紹介した浪人が、

「竹村武左衛門の朋輩じゃと」

と横柄に訊いてきた。

「さよう」

と品川柳次郎が磐音に代わった。

磐音は式台の奥が恐怖に眩されたように森閑としているのを確かめた。

「われらは仕事仲間であり、家族ぐるみの付き合いもいたす仲です。竹村武左衛門は、徹夜仕事ならば徹夜と、家族に言い残す習わしにございました。それがいつもどおりでかけたまま、昨夜は長屋に戻っておりませぬ。どうやらお手前方の様子を見るに異変が生じたように見受けられる。正直なところ、事情をお聞かせてくだされ」

美濃部が小さく頷くと、

「ちと手違いがあって二、三日、戻れぬことになった。数日内には帰宅できるによって、待ててと家人に伝えてくれ」

「お待ちくだされ。それがしがお尋ねしておるのは、戻れぬ事情にございます」

「話が込み入っておる。それに主の不知火現伯様の身分に関わることゆえ、待てと申しておる。家人には、留守の間の日当はきちんと払うと伝えよ」

美濃部はそう言うと屋敷の奥に引きこもうとした。

「美濃部どの、われら、子供の使いではござらぬ。そちらがそうなれば、こちらも考えがござる」

「考えとはどういうことか」

美濃部が品川を睨んだ。

「われら、いささか南町奉行所と関わりがござる。まずはこの事情を話して、町方の手で竹村武左衛門の行く先を突き止めるまでにござる」

柳次郎は南町奉行所の名をだした。

「そのほうら、町方と昵懇とは」

美濃部が品川の真意を探るように見下ろした。

「さよう、年番方与力笹塚孫一どのとは、殊更ねんごろでな」

柳次郎が勝手に笹塚の名まで持ちだして畳みかける。

美濃部がさらにじいっと二人を見た。

「坂崎さん、これでは埒が明かぬゆえ、数奇屋橋に参ろうか」

柳次郎がさらに言い、踵を返した。

「待て、待ってくれ」

柳次郎が振り返った。

「事情を話せば、騒がぬと約定するか」

「駆け引きはできぬ。だが、そなたらが正直に話してくれれば、相談にも乗ろう」

本所育ちの柳次郎はさすがに折衝が上手い。

「よし、こちらに参られよ」

美濃部は草履を突っかけると、二人を裏庭に案内した。そこには木樽が鎮座して、一人の浪人が遠くから見張りをしていた。漬物樽と思しき樽にかけられた縄は、切られていた。

「当家の現伯様は、昨日、押上村の出羽久保田藩佐竹様の中屋敷に、御用人どのの往診に参られた。昼過ぎのことで、五つまでには帰られることになっていた。だが、五つを過ぎても四つを過ぎてもお戻りがないので、われらは、佐竹様の屋敷に使いを出して問い合わせた。すると七つ前には、戻られたということで、われらが屋敷に戻ってみると、この桶が門前に置かれてあった」

「なんでございますな」

柳次郎が訊き、美濃部が見られよと顎で指した。思わず柳次郎が樽に歩み寄り、見張りの浪人が蓋を取った。

「わああっ！」

柳次郎が悲鳴を上げて後退りすると、植え込みの影に走りこんだ。

磐音は、ゆっくりと樽の覗き込んだ。

人の頭が樽に転がっていた。くわい頭のところを見ると医師のようだが、現伯にしては若かった。

「どなたでございますな」

磐音の問に美濃部が、

「そなた、なまかと違い、なかなかの肝っ玉の持ち主じゃのう」

と言い、見張りの浪人に蓋を閉じるように命じた。

「竹村武左衛門は、この二人にご一緒したのでございますな」

「もう二人の仲間と一緒にお駕籠に従っておった」

「その二人の用心棒どのもお戻りないのか」

美濃部が頷く。

「とすると、他に行方を絶たれたのは、医師の現伯どの、竹村どのに二人のお仲間の四人ですかな」

「善三郎の兄弟子の堤悠太郎の五人だ」

磐音はしばし考えるために柳次郎の姿を求めた。植え込みの陰で吐いていた柳次郎が青い顔でよろめき出てくると、

「粗相をし申した」

とだれにともなく謝った。

「近頃の若い奴ときたら肚が据わっておらんでな、仕方がないわ」

美濃部が吐き捨てた。

柳次郎が磐音の後ろに戻って来て、

「本物の首でしたか」

と訊いた。

「そのようです」

「よくまあ、坂崎は平気ですね」

呆れたように言う柳次郎には構わず、磐音は訊いた。

「美濃部どの、お駕籠の連中はどうなりました」

不知火現伯は駕籠に載って往診にいったはずだ。

「戻っておる」

「ちとおかしゅうございますな。一体、現伯どの一行はどこで行方を絶たれたのでございますか」

「さてそれが……」

美濃部が口籠って、

「それがしの友が玄関先で口にしたは、虚言ではございませぬ。われら、いささか町方と繋がりが有り申す。不分明の説明を申されるならば、この足で数奇屋橋に出向きます」

美濃部が見張りの浪人に、

「玄関先に戻っておれ」

と命じると、

「現伯様が拐かされたのは愛妾のおつねの家だ」

「患者からの帰り道、妾宅に立ち寄られたのですな」

「さよう」

「妾宅はどちらです」

「亀戸村の出羽鶴岡藩の抱屋敷西隣、亀戸町と接したところにござる」

「乗物はその妾宅の門前に待たされていたのですね」

「さよう、現伯様が妾宅に立ち寄られる時間はせいぜい一刻、こちらの奥方がうるさいでな」

と美濃部は、家をちらりと見た。

「現伯様が立ち寄られたとき、すでに賊がおつねの家に入り込んでいたらしく、竹村どのらは一気に制圧されたと思える。現伯様ら五人、さらには妾のお常も小女も一緒にどこぞに拐かされた。お駕籠の者たちは、待てど暮らせど帰る様子のない現伯様一行を見に参って、妾宅がもぬけの殻ということに気付いたのだ。それで慌てて、当家に立ち戻って急を告げたという次第じゃ」

「様子がいささか分かりました」

と磐音が答え、

「さて、このお弟子どのの首にはなんぞ手紙が添えてありましたかな」

「五千両を用意せよ、日時、受け渡しの方法は後日知らせる、という脅迫状が中に入って追った」

磐音と柳次郎はようやく竹村武左衛門が陥った危難を理解することができた。

「ご両人、当家では五千両支払っても現伯様を取り戻したき所存にござる。町方をいれるこてゃ、現伯様の命に関わることゆえ、届けておらぬ。そこのところを斟酌の上、しばしわれらに猶予をくれぬか」

と美濃部三五郎が言った。

「美濃部どの、そなた方には、現伯どのらを拐かした相手に心当たりがあるのではございませぬか」

「それはない。だがな、いささかわれらにも手蔓がござって、取り戻す確信がござる」

「現伯どのはなぜ、お手前方のような剣術家を用心棒にお雇になっておられたのです」

「昨秋ごろより頻繁に現伯様は脅迫を受けておった。それで、久保田藩といささか関わりのあるそれがしが護衛の任を頼まれておったのだ」

「相分かりました」

と美濃部三五郎が頭を下げた。

「品川さん、事情が事情だ、推移を見守ろう」

なにか言いかけた柳次郎に目配せで口を封じると磐音は、

「お内儀は寝込まれておられるのですか」

と美濃部に訊いてみた。

「余りの心労に実家に戻っておられるわ」

「実家とはどちらでございますな」

「そのほうらがこそこそ動くと、現伯様ばかりか竹村どのの命にも差し支えるぞ」

と美濃部が釘を刺し、

「いかさまさようにございましたな」

と応じた磐音は、柳次郎を連れて、不知火現伯の屋敷の門から外に出た。